
風邪を引いた日

緋色

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風邪を引いた日

【コード】

N9802N

【作者名】

緋色

【あらすじ】

「薫が風邪引いた？」

「うん、今朝メール来たんだけど……」

本文より。

(前書き)

途中、視点変更があります。

「薫が風邪引いた？」

「うん、今朝メール来たんだけど。もしかして、知らなかった？」
「まったく」

薫が風邪ねえ。

「馬鹿でも風邪引くんだな」
「確かに」

あはは、とひとしきり笑った。

「じゃ、学校終わってからお見舞いよろしく」
「……………は？」

「私部活あるし、結城なら家知ってるでしょ？」
「知ってるけど」

「それに、私より結城の方があの子喜ぶし」
「は？ どういう意味……………」

「あ、ホームルーム始まる。私クラス戻るから。じゃ」
「おい、桂木」

「おい、全員席座れ！ 桂木、早くクラス戻れ」
「はいはい」

担任が教室に入り、話はうやむやになった。

「出席取るぞ。岩城、江藤、緒方……………」
「……………薫が風邪、か」

見舞い行ってみるか。
担任の声を右から左に受け流し、そんなことを考えていた。

「本当に来ないのかよ」

一日の授業が終わり、薫の家までの道のりで俺は一人呟いた。手には見舞いの夕凧屋のカステラ。薫の大好物だ。

「んつと、確かこつちだつたか」
十字路を右に曲がる。

「あいつの家なんて何年振りだ」
最後に行ったのが……小六の夏だから、四年振りか。中学入ってからは、お互い恥ずかしくなって、家に行つてないからな。

「変わったな、この辺」
中学も高校も通学路とか遊ぶ範囲にこの辺は入ってない。にしても、四年でけつこつ変わるんだな。

「つと、ここだ」
普通の住宅街の一角。白い屋根の家。うん、ここは記憶のままだ。一応表札を確認した。「高柳」と彫られた黒い表札。おじさんの手作りだっけか。

玄関に立ちインターホンを押す。
しばらく待つと玄関が開いた。

「はいはい。あら？ 結城くん？」
「ども、お久しぶりです、おばさん」

玄関から出てきたのは薫の母親。

「ええ、久しぶりね。今日はどうしたの？ 薫に用？」
「用つちや用ですね。風邪引いたつて聞いたんで見舞いです」

「ああ、そうなの。ちょうど良かったわ」
手をパンと叩くおばさん。ちよつと嫌な予感。

「なにがですか？」
「実はね。ちよつと用事が出来ちゃつて、出掛けなきゃいけないかつたの。それで……」

「……わかりました。家にいればいいんですね」
「さすが、結城くん。二時間ぐらいで帰れると思うから。あ、それと、台所にあるお粥、あの子に持って行ってくれる？ 私すぐ行かないといけないから」

そう言つて靴を履いて俺の横を通る。

「あ、結城くん」

「はい？」

呼びかけられて、歩きながら振り返ると、

「風邪引いてるからって、薫襲っちゃ駄目よ」

「……」

ゴンっ！

玄関に頭をぶつけたのは言うまでもない。

「普通、久々に会った娘の友人に留守を頼むか」

薫の部屋は二階の手前。鞆を背負い、カステラの入った袋を腕に下げ、両手でお粥と薬と水の載ったお盆を持つという、

すごい不安定な格好で階段を上がる。薫の部屋のドアには、「かおる」と書かれたプレートが掛けられている。

「薫、起きてるか」

ノックは無理だから、声をかけた。

「ふみゆ？ お母さん？」

完全に熱にやられたか、寝ぼけてるか。親と友人の声さえ判別できてない。口調からして後者だろうけど。

「入るぞ」

ちよつと無理してお盆を片手で持ち、ドアを開ける。

薫の部屋は白を基調にしたシンプルな部屋。ベッドも本棚も机も真っ白だ。

ベッドで毛布にくるまっていた。

「おい、薫」

「ふみゆう。あれ、お母さん、背伸びた？ それに声低い……」
毛布から顔を出し、俺を見た。

「……はれ？」

「俺だ」

「………結城？」

「ああ」

「さすが元看護師」
話しながら、なんとなく部屋を見渡した。
「あんま部屋見ないですよ」
睨まれた。
「お前、相変わらずシンプルなもの好きなんだな」
「人の好みなんてそうそう変わらないよ。……………」
「ちそうさまで
した」
「お粗末様でした」
「結城が作ったんじゃないでしょ」
「そうだけど、なんとなく。あ、薬飲めよ」
お盆をよけて、薬と水を渡す。
「……………これ苦いんだよね」
「薬は苦いもんだ。子どもじゃないんだから飲め」
「高ーはまだ子どもだよ」
しばらく薬を睨んでから、意を決して薬を飲み、水で流し込んだ。
「うー、苦い……………」
「変わらねえな、本当」
「……………ねえ、結城」
「ん？」
「久しぶりだね。こうやって話すの」
「まあ、中学入ってからは桂木とか早瀬とかいたからな」
「そうじゃくて、まあ、それもだけど。こうして、私の部屋来るの
小学校以来でしょ」
「来る用事がないからな」
「うん、間違っではないない。」
「用事なくても来てたくせに」
「小学生じゃないんだ。女子の家行って変な噂立ったら嫌だろ」
「……………別に嫌じゃ……………」
「それにお前だって、中学入ってから俺の家来てないだろ」
「そうだけど。……………ふあ」

欠伸をし、眠そうな目を擦った。

「眠いのか？」

「うん、薬効いてきたかも」

「そっか。とりあえず眠いなら寝ろ。その方が早く治る」

「うん、そうする。結城はどうするの？ ……帰っちゃおう？」

不安そうな顔で俺を見た。そういう顔で見ないでほしい。

「……おばさんに頼まれてるからな。おばさん帰ってくるまではここにいろよ」

そう言っただ薫の頭を撫でた。

「うん、ありがと。……えへへ」

「どうした？」

「結城に頭撫でられたの、久しぶり、だから」

少しずつ語尾が弱くなっていく。

「なんか、懐かしい、なっ、て……」

「……寝たか」

静かな寝息を立てている。

「さて、どうするかな」

立ち上がり、暇つぶしにと本棚を物色する。

「君がいた夏」は恋愛小説か。「ツバサ」はファンタジー漫画。

「じゃんここにじゃんこまごにゃんこ」は……って、なんだこれ？

開くと、猫が大量に載ってる童話だった。

「……」

とりあえず漫画を取ってベッド横に戻った。開いて読み進めていくけど……。

「……」

「すうー、すうー」

「……」

「むにゃ、すうー」

「……はあ」

本を閉じ、机に置いた。

「気になって読めないっての」

久しぶりに近くで見た薫の顔。

「噂立った方がいってのに」

中学に入って、薫の家に来なくなったのは、ただ恥ずかしいから。中学に入って、いつの間にか薫を意識してる俺がいたから。

本人前にすると素直になれないって損な性格だよ。

「ふぁ」

思わず欠伸をした。眠くなってきたし、寝不足かもしれないな。

そのまま、ベッドにもたれかかるように倒れ、少しずつ意識がなくなっていくた。

KAORU SIDE

「ん。けほっ」

鼻が詰まっているせいか、若干感じた息苦しさに目が覚めた。

「はふ、ふみゅ」

……覚めてないかな。言葉変だし。

視線に入る部屋の天井。えっと、今日は風邪引いたから学校休んで、未来に休むってメールして、ベッドで寝てて、結城が来て……。

「あ、結城」

一気に意識が覚醒した。慌てて結城を探すと、慌てる必要がなかったぐらいあっさり見つけた。

「寝てる？」

「試しにほっぺたをつつく。」

「……………」

うん、寝てる。

「うーん、変わらない」

相変わらずの寝顔だ。学校ではどんなに眠くても寝ないから、寝顔見るのは、ホント何年振りだろ。

「うーん」

ぶにつ、とまたつつく。ちょっと身じろぎする。

「……………」
もう一回つついてみる。また身じろぎする。

「……うーん」

なんか楽しくなってきたけど、起こしちゃ悪いし、もうやめよ。

「あれ、携帯」

枕元に置いてた携帯が光っていた。

「未来から？」

メールを開いた。

『やつほー、風邪どう？ 風邪引いてる薰にサプライズってことで、結城送ったから。嬉しい？』

「心臓に悪いです」

結城に心配かけなくなかったから、メールしなかったのに。未来に言わないでって言うべきだったかな。でも、よく考えたら、どちらにしろ伝わるよね。

『明日は来れる？ そろそろ期末考査だから、勉強会開こうかなって。もち、結城もメンバー』

結城と勉強会。ならいいかな。

『それじゃ、早く治してね。バイバーイ』

携帯を閉じようとしたけど、まだ本文は続いていた。

『PS 風邪で弱ってるところ襲われないでね』

「……っ！」

思いつきり携帯を閉じた。体温が上がってるのは風邪のせいじゃないと思う。

「うう、あの馬鹿」

深呼吸して落ち着いてから結城を見た。

『サプライズってことで、結城送ったから』

心臓に悪い。悪いけど、正直嬉しい。中学入ってから二人きりなんて、滅多になかったから。

『変な噂立ったら嫌だろ？』

別に構わない。むしろ立ってくれた方が嬉しかったり。
中学に入る前から、結城のことが好きだったから。

「意気地無し」

それは自分に向けた言葉。

それでも我慢できないこともあるから。

「……いいよね」

結城の手を握って、もう一度目を閉じた。

KAORU SIDE END

「ん？ 何時だ」

ヤバい。けっこう熟睡してたかも。時間を確認しようと、左ポケットの携帯を出そうとして、左手の違和感に気づいた。

「……えっと」

俺か？ 俺から握ったのか？

離すのは勿体無い気がしたが、いつまでも握ってるわけにもいかない。眠っていたので大して力も入ってなく、簡単に手は離れた。自由になった左手で携帯を開く。

「もうそろそろ帰ってくるかな」

来てから二時間ちよつと経っていた。外を見ると太陽は沈みかけ、辺りは薄暗い。

「ただいまー」

ちよつど声が聞こえた。

「帰ってきたか。ん？」

立ち上がるうとしたが、なにかに引つ張られた。なにかにあって、一人しかいないけど。視線を向けると、薫が制服を掴んでいた。

「はあ。おーい、薫、離せ」

「んー、すうー」

言っても離さない。それどころか、力入ってきてるような。

「おい、薫」

「むー」

「うおー!」

ぐいつ、と俺の体が引つ張られる。

「ちょー! おい、離せって!」

「すうー、すうー」

寝ぼけてんのか!?

薫に抱きしめられる形になってるけど、これ見られたらまずくないか。

「ただいま、結城くん。ありがとね、見てて、くれ、て……」
「タイミング悪くおばさんが入ってきた。」

「……………」

「……………」

「すうー、すうー」 あー、居心地悪い!?

「えつと、お邪魔だったわね。それじゃ!」

「いや、待つておばさん! 多分考えてること勘違いですから!」

「今日はお赤飯かな」

え? 無視?

「ちよつと、おばさん!」

「ふんふふー」

「聞いてくださいって!」

「すうー、むにゃ」

勘違いしたおばさんに説明するのに十分近くかかり、薫が起きて離してくれたころには、月が空に昇っていた。

後日。

「まさか、結城の家来ることになるとはね」

薫が笑いながら言った。

「うるせえ。てか、お前の風邪がうつったんだろ」

「だから、お見舞い来たんだよ。はい、朝凧亭のプリン」

見事に薫の風邪がうつり、学校を休んだ。

「お粥、食べさせてあげようか」

「アホ」

まあ、薫がお見舞いに来てくれたから、今はいいとしよう。

(後書き)

誤字脱字、その他ありましたら、感想、メールでお知らせください。

読んでくださりありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9802n/>

風邪を引いた日

2011年8月24日03時31分発行